

「日々の理科」(第1890号) 2019,-9,11

## 「アサガオ“まるごと”観察(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

5年生理科での「アサガオの観察」は、1年生の栽培活動とは目的がちがう。1年生は、種子から「一人一鉢」で育て、世話をしながら、植物の成長とともに、自分も成長するという活動だ。その中で、発芽し、ツルが伸び、つぼみができ、「今日は〇個咲きました」と記録し、最後は種子を採取するという営みがある。5年の場合は、栽培そのものが目的なのではなく、花から果実への変化を観察することが目的である。



これは、恐らく翌日には開花しそうなつぼみ。花弁を「こより」のようにねじったように見える。アサガオは合弁花なので、この「畳み方」が開花して大きく展開するのに、最も有利なのだろう。



左はつぼみ、右は今朝開花して、しぼみかけている花だ。左側(ツルの先端側)から、右に行くにしたがって、花が少しずつ成長していくのがわかって、非常に観察しやすい方法だ。



よく見ると、一つの葉脇(ようえき)から、複数の花柄(かへい)が出ているのがわかる。興味深いのは、そのすべてが一度に咲いているのは稀で、一つの葉脇に日に1輪しか咲かないことだ。こうして、茎からの水分や養分が一ヶ所に集中しないようにする工夫だ。



このあたりには、つぼみ、開花後の花、花弁が落ちた花などが混在している。「つぼみ」と「花弁が落ちた花」はよく似ているので、この区別をさせるのも、良い観察ポイントになる。



一番右(根元)までいくと、果実もできている。子どもたちは「根元に近いほど花から果実に成長している」と、容易に気付くことができる。